インターネットの活用

吉　田　純　子

『司書課程年報 No. 2（1999)』には井上富江先生による「文献入手へのインターネット活用の勧め」が載っている。実際私も授業に必要なデータ、ニュース等を知りたいときは、あちこちの図書館にでかけ関連文献を探すよりも、インターネットのサーチエンジンであれこれ探して、ウェブ上にある資料で間に合わせるようなことをしている。購読雑誌ならぬ購読メールマガジンは、それ自体最新情報をもたらすのでありがたく、さらにありがたいのは参考としてまたは典拠として挙げられているウェブサイトの情報である。関連情報や更に詳しい知識を即そこから手に入れることができてしまう

インターネットと私の接点は、ある研究機関で情報システムを導入する仕事に取り組んでいた1991年にさかのぼる。それは、インターネットへの接続を可能とする通信プロトコルである TCP／IP(日本では1988年から使用が開始された。) を仕様に加えることから始まった。現在では当然の設定であるが、当時はわざわざ条件として入れる必要があったのである。

1993年には女性情報に関する情報システムの構築に取り組んでいたが、1995年に北京で開催予定の第４回世界女性会議に向けての世界の動きをとらえ、その情報の収集も担当していた。国連をはじめ欧米諸国では、女性の問題（地位向上、差別撤廃、風習・伝統とからんだ虐待の告発...）を扱うサイトやメーリングリストが既に多く開設されていた。Mosaic（1993年に開発されたインターネット・ブラウザ。当時はちょうど登場したばかり）の画面に示されたページからハイパーテキスト機能で関連のページへジャンプしつつ、リンクをたどって世界中の女性問題関連の機関、NGO・NPO の発信を見ていった。各機関の活動時間帯に関係なく、また情報提供依頼の手続きの必要もなく、自由に各国を巡り、情報を探索できることはとても心地よく、気がつくと夜になっているということが幾度もあった。そのときはまた、gopher のツリー型からｗｗｗのメッシュ型への変換期でもあった。地味な文字のみのテキストや統計データの画面が、画像や音声も使える内容に次々と書き換えられ、世界各国の女性をめぐる暴力、虐待、差別の状況が効果的な映像と共に示され、女性に関する情報の発信がインターネットの活用により画期的に変わることを実感した。

ホワイトハウスがインターネットに接続し、その内部を公開するというキャンペーンを大々的に行ったのもこの年であった。関係者にインターネットを紹介し、予算を増やしてもらう（ネットワークの設置と維持のための経費の確保が大変であった。）よい機会ということで、ホワイトハウスの内部探訪のデモを行ったりした。なお、日本の首相官邸が接続したのは翌年の1994年である。

1995年１月に阪神淡路大震災があり、このときに電話等の情報インフラの途絶に代わり、インターネットが安否情報、現場の被災情報の発信に威力を発揮し、日本での飛躍的な普及が促がされたことは知られている。テレビ、ラジオで刻々死者の数が増えていくのを聞きながら、燃えさかる被災地の映像が流れるパソコン画面を危機感の中で見守ったことは今なお鮮明な記憶である。

現在インターネット上の情報は膨大である。

そのことから、インターネットがあれば図書館は要らないとする考え方も出てきている。WorldCat（OCLCが提供する世界最大のオンライン書誌データベース。書誌レコード約5,300万件）から200万件（100以上の図書館に所蔵されるポピュラーなタイトル）をGoogleに提供するというパイロットプロジェクトが2003年7月から2004年6月まで実施されているという。解説によれば、図書館以外のサイトを利用しているウェブの情報探索者を図書館に導き、ウェブ上での図書館の存在感を強めることを目的としているとのことである。

一方で、オタクサイトの繁栄ぶりも目を見張る。八犬士の名前を全部思い出せなくて、インターネットを頼ったとき、『八犬伝』の時代背景、地図画像と地名解説、登場人物像と履歴、謎の考察、年表、関連書籍を盛り込んだサイトを見つけた。まさに専門主題百科の趣。ハイパーリンクも駆使されている。このようなサイトは雑学に役立つことが多いし、原文があれば、さらに眺める楽しみが増す。

インターネット上の情報の問題点として、あまりにも膨大なうえに、生成自由なデータであることから、不安定性、信頼性の低さ、どのような情報があるかを把握できるメタデータ（ダブリンコアやISOなど国際的に検討が進められているが）の欠如、検証の手法がはっきりしていないこと、などが指摘されている。

このような中、情報を扱う司書を養成する司書課程の授業（レファレンスサービス演習、資料組織演習、情報検索演習）にインターネット情報資源をどう取り入れて行くか、教える側の情報資源としてばかりでなく学生側の学習にどのように組み込むかは大きな課題である。

３年生を対象としたレファレンスサービス演習で利用する情報源は文献資料をメインとしている。インターネットの時代にあって、レファレンスサービスの情報源として文献資料に限るというのは時代錯誤のように思えなくもない。メインの情報源としない（できない）のは、上述の情報の不安定性と信頼性の低さが理由である。情報を得たい人が自分の責任でインターネット情報を使うのはよいが、司書が利用者にインターネット情報源に基づく情報を安易に提供するのは責任ある回答とはいえない。

授業に取り込むには、まだ問題がある。ひとつには、受講者全員が常時使えるインターネット環境がまだ整っていないこと。ふたつめは、授業形態の課題である。デジタル・プロジェクターを使った授業では学習への動機付けとしての効果はあるが、記憶への定着については疑問であり、期末試験の成績向上につながっているとはいえない、との反省が実践者から聞かれる。また、映像は理解しやすい半面、テレビを見るような受身の姿勢を強要するとして、安易な利用の戒めを説く人もいる。

当分試行錯誤が続きそうである。

（よしだ・すみこ　別府大学教授）